

令和 7 (2025) 年度 沖縄に縁ある学生への奨学金事業
生活状況(中間)報告書



1. はじめに

当財団では、沖縄に縁のある学生が、それぞれの専門分野において学びを深め、将来、社会のさまざまな分野で活躍する人材へと成長することを支援するため、「沖縄に縁ある学生への奨学金事業」を実施している。

令和7（2025）年度の奨学生は、工学、建築、法学、医学、教育、スポーツ・トレーナー分野など、それぞれ異なる分野で学修や研究、実習、課外活動等に取り組んでいる。

本報告書は、奨学生から提出された生活状況（中間）報告書の内容を基に、学業・研究や学生生活の状況、奨学金の活用状況、今後の目標等をまとめたものである。

2. 学生生活の状況（学業、部活、ボランティア、サークル等）

奨学生は、下記のとおり、それぞれの専門分野における学修・研究に意欲的に取り組んでいる。

- 医療分野における利活用が期待される、日本在来の有用植物のゲノム解析と品種開発に取り組む、その成果を米国の国際学会で発表し、学術論文の受理に向けて執筆を進めている。
- 沖縄で独自に発展した建築資材を生かした改修事例を研究テーマとし、離島を含む研究対象物件の現地調査を行うなど、沖縄の地域性に根差した研究を進めている。
- 特修法曹コースで法科大学院の専門的な授業を履修し、法律実務に関する知識を深めている。
- 臨床医学を中心に内分泌学や産婦人科学などの専門科目を学び、医学科研究に向けた研究室配属の準備を進めている。
- 教育分野において、沖縄の子ども食堂について現地調査を行うとともに、小学校でのインターンシップや模擬授業を通じて実践的な学びを重ねている。
- 工学分野において、機械学習、ネットワーク、光工学などの専門科目を履修し、今後の研究と大学院進学に向けた準備を進めている。

一方で学校生活だけではなく、課外活動にも積極的に取り組んでいる。エイサーの演舞を通じて地域行事や学内イベントに参加する学生、スポーツの大会で好成績を修める学生、クラブチームの合宿やパラバスケットボール選手のトレーニングサポートに携わる学生など、それぞれが学業以外の活動にも力を注いでいる。

また、児童を対象としたボランティア活動や大学のオープンキャンパス運営への参加など、人との関わりを通じて経験を広げている様子も報告されており、多角的な分野において状況が確認できた。

3. 活動成果と成長の実感

奨学生の報告からは、専門知識の修得だけでなく、研究、実習、地域活動、スポーツ等を通じて、それぞれが具体的な成果を積み重ねていることがうかがえる。

国際学会での研究発表や学術論文の執筆、沖縄県内の離島における現地調査、博物館実習や教育実習に向けた準備、小学校での実習や模擬授業など、学内での学びを実践につなげる活動が見られた。

資格取得にも積極的な姿勢が示されている。教職課程に加えて学芸員課程、司書教諭資格、地域公共政策士等の取得に励む学生や、一級建築士資格の取得を目標とする学生がいる。また、アシスレティックトレーナーとして実践的な活動経験を積み、将来的な鍼灸資格の取得も視野に入れながら、プロチームの専属トレーナーを目指す学生もいる。

奨学金は、学費や生活費のほか、教科書・参考書等の教材費、研究に必要なPC関連費用、学会や現地調査に伴う旅費・交通費、実習費、県外合宿費用等に活用されている。経済的な負担が軽減されたことで、学業や研究により集中できる環境につながったとの報告も多く上がった。

このように、奨学生は支援を学修環境の充実や実践的な経験の獲得につなげ、それぞれの目標に向けて着実に歩みを進めている。

4. 支援への感謝と今後への展望

奨学生からは、奨学金によって経済的な不安や負担が軽減され、学業や研究に専念できていることへの感謝の言葉が寄せられている。

今後の目標も多岐にわたる。研究分野では、修士論文の完成や学術論文の投稿・受理を目指すとともに、農業ベンチャーでの活動を通じて社会課題の解決に挑戦したいという意欲が示されている。建築分野では、卒業後に組織設計事務所で設計実務に取り組み、一級建築士資格の取得を目指している学生の報告があった。

法学分野では、特修法曹コースでの学修をさらに深めるとともに、エイサーの活動を通じた地域や団体とのつながりを大切にしたいとしている。医学分野では、専門科目や臨床実習に向けた基礎知識の定着に加え、英語学習やボランティア活動を継続し、将来の医療現場に役立つ経験を積むことを目標としている。

教育分野では、介護等体験に向けた社会福祉の学習や、農業体験を含むさまざまな経験を通じ、将来子どもたちに還元できる学びを増やしたいとの考えが示されている。スポーツ・トレーナー分野では、卒業後に整骨院で働きながらトレーナー活動を続け、現場で学んだ症例への対応や処置を今後の活動に生かしたいとしている。

また、卒業後に企業へ入社して社会人として新たな環境で成長することを目指す学生や、大学院進学を見据え、研究と大学院入試の勉強を両立させたいとする学生もいる。

それぞれの進路や専門分野は異なるものの、奨学生一人ひとりが自身の将来像を具体的に描き、その実現に向けて学びや経験を積み重ねている様子など、支援の成果が確認された。

5. 総括

今年度の中間時点において、奨学生はそれぞれの専門分野で学業・研究に真摯に取り組むとともに、実習、資格取得、地域活動、ボランティア、スポーツなど、多様な活動に主体的に取り組んでいる。

また、沖縄の建築文化を対象とした研究、沖縄の子ども食堂に関する調査、エイサーを通じた地域との交流など、沖縄とのつながりを意識した活動も見られた。一方で、奨学生の学ぶ分野や将来の進路は幅広く、研究者、技術者、建築士、法曹分野、医師、教員、トレーナー、企業人など、それぞれの目標に向けて着実に歩みを進めている。

当財団の奨学金は、学費・生活費のみならず、研究、教材購入、実習、現地調査、課外活動等を支えるものとして活用されており、奨学生が学びや経験に取り組むための環境づくりにつながっている。

今後も当財団は、沖縄に縁ある学生の学びと挑戦を支援し、それぞれが培った知識や経験を生かして社会のさまざまな分野で活躍していくことを期待する。

奨学生一人ひとりのさらなる成長と今後の活躍を願い、本年度の生活状況（中間）報告をここに総括する。

以上